

百舌鳥

電線の銀色の波のその一つに百舌鳥がきてゐる初雪がふる たまこ

水晶体替わりし眼に一本の裸木立てり冬深みつつ 花

心瘦せて裸木に添ふ白き壁冬の日まるく両の手に受く 真奈

添ふてゐる猫とわたしが添ふてゐる凧の穴掘つただけど 海月

シリウスを連れてオリオン昇る空いつまでも父を待ちしあの夜 千種

清浄(きよら)なる光を曳きて枯葉舞つ見守りいるほかあらざる痛み 花

星形に割れてしまった鏡からガラスのかけら七つ微笑つて 真奈

夜を彫(え)りてオリオン光る寒の空ひそみて生くる深きの在りしれん

被災地の窓に灯りの点り初め空に響ける第九の祈り 文枝

降誕祭前夜のミサに額づけりまだ希望あるこの世なるべし 千種

在るのかな壊れてんじやないのかな宙から見れば青い星でも 海月

沈黙は雄弁に語りはちやめちやの国よりワタクシの目が大事 花

もの言ひと別にうつるはカメラアイ鋭さこそテレビを視つつ れん

母哭けり津波のテレビ残像の内なる母がこの吾の前に 丹仙

うちつづく天災人災に壊れゆく亡き人びとのふるさと地球 たまこ

現世にそぞろ煙りて雪降り父母夫逝き国亡ぶとも 花

鐘を鳴らしからくれなゐの消防車が疾駆してゆき雪の歳晩 たまこ

数へ日の暦の写楽目を剥いて客を呼び込む雪の本店 真奈

写楽斎われの歌詠み真似事に歳晩のとき学び楽しく れん

モーセの杖一振り欲しき大津波大つごもりの出エジプト記

文枝

すつぱりとなべてを包む大歳の雪に天降(あも)れる神もあるべしかわせみ

聖樹となれぬ木々ら穏やかなそれぞれの姿に白き雪を冠りて

花

新玉の年の明けたる愛鷹の尾根の高きに白き半月

れん

なかなか雲から出でぬ初日の出群像黒く浜に溢れて

蘇生

天色の蜜滴れる今朝の空ガラスの鼻は羽をたたみて

花

ふくふくとあまたの夢に膨らみし翼たたみて眠るふくろふ

かわせみ

ふくろふと貌向き合ひし昼下がりと突とひらめく絵文字の心

文枝

星ばかり喰ふて瘦せしふくろふに優しき古歌の森に流るる

真奈

情況はゆるやかに解けあけぼのの星を喰らいて友よ生き抜け

花

幾万の紋白蝶の羽のやう二千五年のあけぼのの雪

たまこ

幾万のほたる舞ひ飛ぶ海底に六〇年の生をこそ生く

海月

耳許に「僕です」の声聞えしか残る蛍のきらきらとして

真奈

幾度なく目覚めて夜の浅浅に夜光時計の数字は光る

れん

風音に母の寝息の消されつつ夜光時計の秒針光る

たまこ

生きなむか寒木瓜の空三角に猫の目光る廃屋の庭

海月

どのように生きてもさみし高空に辛夷の蕾光あつめて

花

冬休み終はれば淋し夜の茶の間グランマ・モーゼスの絵画の世界

文枝

わが年を諾ひて佳き年の酒生も死もさて諾へるかな?

真奈

木伝いに鳥影のぼる束の間は飲食のこと忘れいるべし

花

膨らんでおなが土を擦りさうな寒の雀が落ち実つひばむ

たまこ

キッチンを覗く雀と目が合ひぬパピポットの湯は滾りたち

かわせみ

ノックして物語またはじまってドレミファソラシド雪の舞ふ夜 真奈

「叩けボンゴ・踊れサンバ」とまねすればカキケキヤットのつぶら目と合ふ たまこ

飛蚊症かなと見据える4分休符鳶の数羽が高く舞いをり 蘇生

尖りゆく言葉を止めてお茶をのむはるばると鳶の鳴く声はして たまこ

白梅のこれから凜と咲きをるか勇気を出せと声の聞えて 海月

永遠に「第二の性」を語るとも海と大地は女性名詞よ 真奈

ゆらのとをくるめきわたるゆめのふちかのふくろうにふかいりをして 花

風花にノロウイルスの紛れをり黄泉の淵より呼びし梟 文枝

風花の流るる果ての蒼き淵あかき椿が炎のごとし たまこ

いま落ちて息あるごとし寒椿アカペラで聞く風のバラード 真奈

ひとりへの愛半ばにて椿落つ蕭条と雨は雪にかわりつ 花

けふ明日と予報の雪を案じつつ坂のぼり行く氷雨降るなか れん

坂の上はあこがれに似て白い雲のゆるやかにゆく空につながる たまこ

なんでかな氷雨降りをり猫は寝てぼくと空気が息をしてゐる 海月

胸に手を置けばゆるやかに上下して眠れる冬の雷鳥を戀う 花

拍動をさらに早める氷ノ山(ひょうのせん)嵐がはこぶ狼の声 たまこ

雪渓をアイゼンの音さくさくと天狼星を胸に抱きて 真奈

胸底に幾日かジラフを抱きおり天変地異の鎮まらぬ地球よ 花

首伸ばし麒麟は仰ぐおほ空へもろびとの夢放ちやらんと かわせみ

空高く麒麟翔ばせよ大櫂眉青くして朝の駅頭 真奈

灯籠の空に昇りて祈らむか安らけくあれ安らけくあれ 海月

雪道をかさじぞうが祈りを持ってやってくる川に棄てた水子らよ大きくおなり

花

雪道に落ちた胡桃の芽吹くころ乳垂れいちゃうの乳飲みに来よ かわせみ

冬空に櫻の枝はスワトウの黒きレースの如く広がる 蘇生

べうべうと流れ灌頂風の影撓められたる木々の悲しき 真奈

べうべうとガンジス河の波の間に御霊たゆたひ小鳥さへずり 文枝

鶴(たづ)の群れ気流に乗りて舞ひあがり嶺越ゆるとき光の微塵 かわせみ

蒼穹に磔刑のごと凧がある動かずにゐる動かずにゐる 海月

銀翼の点となりしを見失う告げ足らぬ目を吾子は残して 花

大空に一と引きたる糸雲の先には見えぬ機影あるらし 蘇生

台風に薙ぎ倒されし杉山の上にふかぶかと青き冬空 たまこ

杉の葉は茶に色づきて福々としたり顔なり憎らしきかな 蘇生

聞き役はのつぱらぼうにしたり顔相槌を打つ梅干しの種 真奈

忽と逝くALSの友の夫嘆きの底に梅のほころび 文枝

盆栽をを土におろしし紅梅のわが丈越ゆるまでの歲月 かわせみ

紅梅を目白つひばむこのショット予定調和も悪くはなくて たまこ

吹く風の冷えびえとして里山の白梅ひとつはつかに開く れん

夜半より疾風が空を吹き抜けて梅の二月の朔は明けたり 蘇生

梅の花が今日散りました病床の母の手紙に一輪の影 田所勉

をさな母が読み我が読みし古絵本を窓辺に開く猫日和なり たまこ

ゆふ闇にかすか香りのありければ梅咲くらむと盲ひたる父 かわせみ

しろじろとしだれ梅さく衣更着にゆきし記憶もふりまさりつつ 花

霜天に鳩笑ひつつ降る降るぞ雲の遠足ぶららららら 海月

笑うこと忘れ来た道戻り行く水の流れる音を頼りに 田所勉

遊学の子は渡りしやロンドン橋マザーグースの歌などうたって 花

漱石も渡りし橋に佇める汝の影に添ひ母もうたわん かわせみ

明暗の凍道に佇つ白き月一盞を置くそれからの君 真奈

林檎の香の言葉なりにきそれからの私の底に仄かに香る たまこ

凍道に林檎がひとつ有りました子守唄など聞かせませふか 海月

山盛りに陳列されしりんごパイタベには失せ朝な朝なに 蘇生

着ぶくれたアダムの拾ふ冬林檎エスプワールの帽を取りつつ 真奈

林檎の名あまたを吾に教えたる父の若かかりふと顛ちくる れん

味爽の朝ひとり紅玉の皮剥けばロンドンゆ届く子のEメール 花

竹田てふ子守唄などありまして紅絹の切れ端すれきました 海月

ぼっかりと空には赤い紙風船盆がきたよと鳶が啼いた 真奈

ふらここの鉄の鎖の凍てつきて華やく月夜待つは寂しき 海斗

木枯らしにふるふシリウス鞆の鉄の鎖の感触に似る たまこ

綾取りの川ならできる何本も母の背に似た雲の懐かし 真奈

綾取りのひとり遊びの女童の細きうなじの微かに震ふ 海斗

桃李和歌連作百首歌集

第六二〇一首より六三〇〇首迄

平成一六年一二月一八日より平成一七年二月六日